

# 1 母語でつながる

## 事例 2

### 「手を洗ったら、ごはん」 ～友達からの母語での声掛けで前向きに～

3歳児 4月(在日3年10ヶ月)

#### こんな時、 どうするの？

4月から入園した3歳児のA児は、これまで、家庭ではポルトガル語でやり取りをして過ごしてきており、集団生活も初めてである。

そのため、言葉が分からないことや、生活の仕方が分からないこと等が様々あり、よく不安そうな表情をしていた。保育者は、登園時に身の回りの始末ができるよう、タオルかけ、ロッカー、机等にA児のマーク（トンボ）を貼り、見て分かる環境をつくるとともに、簡単な母語を使いコミュニケーションを図っていた。A児は、やりたいことを見つけ、遊び出せるようになったものの、周囲の子が片付けを始めると落ち着かなくなり、泣いてしまうことが多かった。

#### こうしたよ！

保育者は、保護者から家庭で使っている生活に必要な母語を確認しておき、園生活の中でも使うようにしていた。

片付けの時間になり、泣き出したA児の思いを受け止めつつ、今の状況を「Arrumar（アフマ）」（＝片付け）と母語で伝えた。それだけでは分からない様子だったので、A児のマーク（トンボ）の付いた机を指差し、食事の絵カードを見せ、保育者が「Almoço（アウモソ）」（＝昼食）と言うと、うなずく姿は見られたものの高ぶった感情はおさまらず、他の部屋まで泣く声が響き渡った。

この声が聞こえ、いつも同じ母語で挨拶を交わしたり、A児を気にかけていたりしているB児が部屋に様子を見に来た。日頃の関わりもあるため、保育者はB児を招き入れた。すると、B児を見たA児は、少しずつ落ち着きを取り戻していった。

聞き慣れた、自分と同じ母語を話すB児は、A児にとって、安心できる存在のようでした。クラスや学年は違っても、心配して様子を見に来た姿を保育者が受け入れ、A児が安心できるようにしました。



落ち着いてきたところで、保育者は生活の流れが分かるように「手を洗ったら、ごはんだよ」とやさしい日本語で声を掛けると、B児が同時に「Lavar a mão para comer (ラバ ア マオ パラ コメ)」(=食べるために手を洗うよ)と母語で話しかけた。

A児は、その言葉が分かったようで、「Almoço (アウモン)」と言い、気持ちを切り替えることができた。B児もA児の表情が明るくなったのを感じ取り、安心して自分の部屋に戻っていった。



その後、保育者と一緒に片付けや手洗いをしたA児は、給食をおかわりするほどよく食べ、前向きな姿が見られた。

日本語と母語を同時に耳にすることで、A児の言葉の理解につながりました。B児と保育者が母語で寄り添うことで、A児は自分から声を発し、前向きになれました。



## ここが大事!

### 母語でのコミュニケーションで前向きになれます

自分に温かく接してくれる保育者や友達との関わりは、心の支えとなり前向きな姿勢で園生活を送れるようになります。加えて、相手を思いやる母語は心に届く言葉となり、安心感・くつろぎを与えます。

また、友達の不安な表情をキャッチし、寄り添おうとしている周囲の友達は、かけがえのない存在です。そのことを保育者も把握しながら、子供同士の育ち合いを大切に、温かい目で見守っていきましょう。



### コラム 家庭で使っている言語が安心感につながります

入園の際に、園生活に必要な言葉について、保護者から普段どのような言葉で伝えているか聞き取りをすることが、とても大切です。

外国籍等の子供とコミュニケーションを取る際、母語を使うことは有効ですが、特に“家庭で使われている言語”を使うとより伝わりやすく、安心感につながります。

“片付け”は  
何と言いますか？

Arrumar  
(アフマ)

